

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No. 24 2020*

三遊亭圓窓“高座本”の分析

—圓窓インタビューを通して—

川崎 加奈子

An analysis of Enso Sanyutei's "Stage Book"

—Through an interview with Enso—

KAWASAKI Kanako

長崎外大論叢

第24号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2020年12月

## 三遊亭圓窓“高座本”の分析 —圓窓インタビューを通して—

川崎 加奈子

### An analysis of Enso Sanyutei's "Stage Book" —Through an interview with Enso—

KAWASAKI Kanako

#### Short Outline

This study analyzes the series of *rakugo* dictation books prepared by the storyteller Enso Sanyutei. In his series of *rakugo* books, every book tells a single story. As of September 2020, Enso Sanyutei has added 389 books to the series. It is very exceptional that a storyteller, who is working entirely by himself, develops and produces this many stories. In this paper, we aim to take the first steps to examining the significance of his creative output by recording the origin of his dictation books through a personal interview and by attempting to classify the stories developed by him.

#### キーワード

三遊亭圓窓 落語 速記本

#### 1. はじめに

近年、と言っても新型コロナ禍発生以前のことであるが、“落語ブーム”と呼ばれる時期が続いて久しい。坂部（2017）の調査によると、東京周辺で前座、二ツ目、真打を合計した噺家の人数は1980年で126名、2015年で278名と、35年間で2倍以上に増加している。また、落語会や寄席香盤の情報誌である『東京かわら版』の情報掲載ページ数を合算すると、2000年4月号から2001年3月号までの一年間で708ページ、2019年4月号から2020年3月号までの一年間では2,071ページと、約20年で3倍近くに増幅していることがわかる。日常生活においても落語の話題を耳にすることは珍しくない。その証左となる落語会の件数、寄席等への入場者数、落語関係の出版物発行数、落語を主題としたテレビ番組数など、数値的な変化の詳細な調査は把握できないものの、“落語ブーム”はもはや漠然とした雰囲気や一時的な流行としてではなく、社会的に落語の存在感が高まっているという事実として捉えるべきではなかろうか。

「ブーム」と呼ばれる以上、「ブームでない」状態があったことも明らかである。ブームでない時期から現在のような状況に変転した要因は、何であろうか。テレビ番組、とりわけ視聴率の高いNHKの朝の連続ドラマや人気若手俳優の出演する映画などの存在の大きさは言うまでもない。しかし、水面下で、落語は2000年に初めて小学校の国語の教科書に掲載され、その後継続して学校教材として採用され続けてきた<sup>1</sup>という事実がある。小学校で落語に親しんだ世代が社会人となっても落語を身近

な娯楽として認識し続けているということが、落語が一過性のブームに終わらないという社会現象を作っているのではないか。国語教科書への掲載こそが、現在の落語の社会的存在価値を堅実に底支えているのではないかと筆者は考える。

六代目三遊亭圓窓（以下、「圓窓」）は、2000年に教科書教材として採用された落語の「著者」である。落語趣味人の間では、圓窓は500の異なる落語を30年間かけて高座にかけた噺家として知られる（この活動は「圓窓五百噺」と呼ばれる）。80歳を過ぎた現在は後進の指導を中心に活動し、傍らで落語の台本をデータにまとめる活動を行っている。圓窓の作成した私家版の台本は本人によって「高座本」（以下、「」なしとする）と命名され、その数は2020年9月現在で380余話を数える。評論家の編集による落語全集、昭和の名人の口演速記本、噺家による台本等の出版物はこれまでも幾多存在してきたが、その演目の数の多さと噺家自身による編集であるという点で、圓窓の高座本は稀有な存在である。この高座本作成活動を追うことが落語史研究の一端となりうるのではないかという漠然とした期待から、高座本研究は始まっている。

本稿では、筆者による圓窓へのインタビューの記録を中心に高座本シリーズを概観する。出来上がった作品としての高座本分析だけではなくインタビューを実施したのは、日々改訂される高座本の今日現在の姿を知る必要があったことと、高座本という「物」よりも、落語史上稀有な作品である高座本を作成し続ける圓窓の落語観に近づきたかったためである。本稿を今後の圓窓の活動及び現代の落語情勢研究の出発点とし、落語史を記録する一翼を担いたいと考える。

## 2. 研究手順

筆者は2000年ごろにイベント参加記念品として一冊の高座本を貰い受けたことをきっかけに高座本の存在を知り、噺の筋や表現について圓窓と意見を交わすうちに全ての高座本に目を通すに至っている。現在は圓窓の許可を得て、圓窓によって Word で入力された高座本データを全て手元に置いている。このデータから、後述する噺のキーワードと演目のリストを Excel で作成した上で、圓窓とのインタビューを実施した。本稿に引用するインタビューは2020年8月と9月の計3回、圓窓の自宅と筆者の研究室の2か所をテレビ会議で結ぶ形で実施した。計7時間となったインタビュー音声は一部文字化し、記録に残した。

一回目のインタビューでは、高座本の作成に関わるエピソードを聞き、二回目と三回目のインタビューでは噺の演目とキーワードについて、筆者が作成した Excel の一覧表を圓窓と共有しながらそれぞれの噺の内容や噺に関わるエピソードを聞いた。その後、インタビューを文字起こしし、その記録を受けてキーワードの一覧表を改訂し、考察を行った。

尚、本稿における「噺」とは落語のマクラから落ちを語るまでの一席を指す。「噺」の名前が「演目」であり、本稿では演目を二重鉤括弧で括る。また、380余話の高座本全体を指す場合は「高座本シリーズ」と呼ぶ。高座本シリーズは、次章で詳述するように、一つの噺が「一号」にまとめられており、通常は一号が一冊の本のように編集されるが、時にテーマごとに複数の噺が「合本」となり「○○の巻」と圓窓によって命名される。本稿では一つの噺がまとめられた一号一冊を、便宜上「一卷」と呼ぶ。

### 3. 高座本とは

「高座本」の名称は圓窓の命名によるものである。高座本は口演のための噺の台本、すなわち、一席の語りをマクラから落ちまで記述したもので、冒頭から本文最後まで読むことで文字通り高座一席が完結する。一号に一つの演目の台本が記述され、2020年9月現在で第1号から第389号まで完成している。

但し、ここで言う「完成」はその噺一巻の編集が終了したという意味ではない。一例として挙げると、第1号巻末の「初版1985. 3. 1 第52推敲改訂2020. 5. 13」の表示から、初版作成後にも52回の推敲が重ねられていることがわかる。全ての号で、印刷し人に配った後にも同様に改訂が繰り返されている。落語は、広瀬（2017）も述べるように、一つの演目に対して一つの決まったテキストが存在する文学作品とは異なる。時代により、演者により、演じる機会により変化し、形の残らない話芸である。圓窓の高座本の389冊も一応の完成はしているが、圓窓話芸の口述作品として日々刻々と変化し続けており、文字通り「完成する」ことはなく、「何月何日時点の第何号の高座本」と称するしかない。圓窓の口述構想メモであるとも言える。また、「本」という名が付けられているが、本ではない。しかし、完成形を見ない形態こそが高座本が生きている落語の口述本たる証左であり、作業が完結していないということをもって不完全なものであると言ってはならないと考える。落語の口述本に言及する際、この落語と文学作品との相違を心得ておく必要がある。

高座本の体裁は、圓窓が Microsoft の Word で入力し、A4の袋とじで印刷、一ページがA5の冊子としてタイトルのない背表紙を付けて製本されている。一つの噺が20ページ程度のものから、120ページを超えるものまである。時に演目ごとに、時にテーマによっていくつかの噺が集められ、「〇〇の巻」として製本される。製本は全て圓窓自身の手によるものであり、上梓されたものではない。高座本の使用法は、圓窓との以下のやりとりからうかがえる。

筆者：たぶん最初は自分のメモとして（高座本を）作ってたと思うんですけど、それが人に配り始めたみたいなのはいつごろか覚えてますか？

圓窓：最初は配ったっていうよりは何だろうな。

筆者：人にあげた……

圓窓：あげたって、まあ、その当時付き合ってた、つながりのあった人やなんか。いろいろ会やなんかによく来てくれた人にあげたね。

筆者：どっちかっていうと、ほかに若手の人たちに教える、稽古をつけるときというよりも、お客さんというか付き合いのある人に配る感じ？

圓窓：こういうのできたよっていうのを。すぐに校正とか修正が自分ちでぼんぼんできるから。それで常にきれいだよっていうことね。自分で今まで使ってた大学ノートと比べりゃ、きれいなもん。

上のやりとりから、「最初は」自分の口述メモとして作成していた手書きのノートをワープロやパソコンで入力するようになり、その出来栄の良さから人への贈り物として配るようになったことがわかる。その後、圓窓によって製本された高座本は、長年、圓窓の出演する落語会やその他イベントでの参加記念、圓窓後援会関係者への贈り物、また近年では後進の落語の指導時に教科書代わりに配

布されている。出版はされていないものの、人手に渡った部数はもはや計り知れない。噺家のメモ以上のものであると言える。

高座本の第一号は、「初版1985年」の記載がある『唐茄子屋』という噺である<sup>ii</sup>。高座本編集の始まりについて圓窓はこのように語っている。

筆者：『唐茄子屋』が、逆にいうとパソコン始めるきっかけみたいな感じですか？ 高座本が。

圓窓：高座本を作るきっかけ？ パソコンをやるきっかけ？

筆者：パソコンを始めるきっかけです。高座本ってたぶん最初自分のノートがもうあって、それがだんだんワープロになっていったと思うんですけど、その『唐茄子屋』をパソコンにしたのが（一部略）

圓窓：そんな感じだね。最初、高座本で、よして決心つけて、やっぱり『唐茄子屋』だろうな。

筆者：85年っていうと、あんまり人が（文字のデータ化を）やってない頃ですよ。85年はワープロ版ですか？ それとももうパソコン版で『唐茄子屋』？

圓窓：ワープロ版だと思ったね。トスワード。それで、ちょこちょこやってた。

（中略）

圓窓：最初のワープロのときはルビ打てなかった。それで、これ不便だなと思ってさ。それで、ようやくルビ打てますよっつったって、ルビはもうちゃんと1行分になっちゃうの。だから、台詞がやたらに膨らんじゃって、これは不便だなと思って、そのうちに、じゃあいっそのことパソコンやりましょうってあきらさんが言ってくれて、パソコンに移ったら、まあ何でもできんじゃないの。ああ、こら、便利だと思ってさ。今まで大学ノートに自分稽古した噺を手書きで書いて、それからそれを修正すんのもまた手書きでこうやって。ここ（筆者注：右掌の外側）が真っ黒になんだよね、鉛筆でやったから。ああ、これはもうじかに打ったほうが楽だし面白いなと思って、それから始めて、第1号が『唐茄子屋』。

上の会話の中では時系列が前後しているが、鉛筆書きのノートに書いていたメモをワープロで「ちょこちょこ」やり始め、ルビに不便を感じていたところに知人からパソコンを紹介され、Wordでの入力が始まったことがわかる。東芝未来科学館のホームページを見ると、日本で初めて仮名漢字変換システムを搭載したワープロは1978年に誕生している。グッドデザイン賞のホームページに東芝の日本語ワードプロセッサ「トスワード」が1984年に受賞した記録が残っているが、当時の価格が758,000円となっている。受賞した機種と圓窓のトスワードが同機種であるかは不明であるが、当時の日本におけるワープロの斬新さがその価格から感じ取れる。第1号『唐茄子屋』の初版が1985年であることを考えると、圓窓はワープロもしくはパソコンによって口述データを入力した時期が最も早い噺家の一人であることが推察される。

高座本シリーズでは、どの噺を第何号で作成するかは、圓窓の思い付きとその場のタイミングで決定している。前述の圓窓とのインタビューを部分的に再掲する。

圓窓：最初、高座本で、よしって決心つけて、やっぱり『唐茄子屋』だろうな。(中略)

圓窓：『子ほめ』を、そうだ、前座噺も入れとこうって、前座噺は『子褒め』が最初だったね。

第1号は「やっぱり『唐茄子屋』だろうな」と、長編人情噺と言われる噺から作成を始め、第2号、第3号も典型的な古典人情噺、第4号で現代文学を基にした創作噺、第5号で古典の噺まで作成した時点で「そうだ、前座噺も入れとこう」となり、第6号では前座噺の『子褒め』が作られる。その後、第389号までの作成時期は、同様に圓窓の「やっぱり」「そうだ」「あれも入れとこう」で積み重ねてきている様子がかがえ、掲載順や全体に占める噺の種類などは意識されていないことがわかる。

#### 4. 一卷の構成

各高座本の第一ページには、高座本としての号数と、「圓窓五百噺」活動時に500のうち何番目に演じたかの番号、噺を象徴するキーワードが4～10単語、ルビ付きの演目、出典・原作者・創作者・脚色・口演者など、噺の舞台である時・場所、登場人物の名前と年齢が書かれている。更に「演じる場合」として注意書きが「本文の『 』は間接台詞、〈…、…〉は独り言・胸の内、〔 〕は重要語です。ですから、声を発してください。また、{ } は場面・状況・動作を、( ) は地口・洒落・参考を表します。ですから、声は出さないように。」とある。

広く知られる評論家編集による落語の読本<sup>iii</sup>では、興津編集によるもの(1973)も麻生編集によるもの(1999)も噺の中の台詞を話している人物がだれであるかの明示はない。年齢はもちろん、時代や舞台の説明もない。実際に落語が演じられる際は噺の中の登場人物の名前や年齢は、当然、説明がないままに噺が展開し、そして終了する。落語は、場面や登場人物の風体を聴衆が自分の頭で思い描くものである。その意味で、広く読まれる落語本は読み手が落語を聞くように読むためのものであり、落語を観賞するための本であると言える。一方の圓窓の高座本は、噺に出てこない登場人物の名前、年齢が明示されており、聴衆のための本というよりも演者のための本という点で、他の落語読本と性質を明らかに異にする。

巻中、噺に入ると、高座と同様にマクラが始まる。台詞の一つ一つに2文字から3文字に略された登場人物がゴシック体で、台詞が明朝体で、書かれている。台詞の漢字の多くにはルビが振られている。

噺に落ちがつくと、「噺の考察集」が続く。考察集について、圓窓はこう話す。

筆者：(高座本の用途は)もう思い付いたまま、人にあげようかなみたいな感じですか？ それか、この話を極めようじゃないけど、ちょっと研究しようみたいな感じとか、お客さん用にあげようとか、どっちもあったと思うんですけど。

圓窓：どっちもあったね。両方あったよね。だから、自分のためもあったから、巻末の考察集っていうのは随分力入れてやったよ。自分の資料だと思って。(中略)『子褒め』を作っているうちにだんだん、あれ、こんなに長かったかなと思うぐらい長くなっちゃって、びっくりして喜んだりなんかしたもんだよ。

「自分のためでもあったため、考察集には力を入れた」とあるように、巻によっては噺の一話にか

かるページ数と匹敵するほどの考察がまとめられているものもある。考察集の中にある項目の種類や数、考察が掲載されているページ数は演目によって異なり、以下のような内容のものが圓窓の命名によるタイトルが付けられ掲載されている。

- ・落ちの要素
- ・噺にちなんだ詩吟や短歌
- ・噺の要約
- ・出典・原話
- ・落ちの改良に関する圓窓の独和
- ・噺に出てくる理解に難渋する言葉の解説
- ・知人たちのエッセイ
- ・噺の出典（落語協会誌に圓窓が寄稿した文章の転載）
- ・該当噺の圓窓口演記録

その他、口演時のエピソード、口演を聞いた人々からの感想のメール文、そのメールへの圓窓の返信等が数十ページに及ぶ巻も多い。これらのエピソードと、口演の時期、そして一席として読める部分を併せて検証することで、噺の工夫の跡を発見するなど新たな研究の余地が大いにある考察集となっている。また、出典（落語の基となった原話）などとともに、圓窓自身が創作したり小咄を膨らませたりした噺などには、自身の入門したてのころの先輩噺家や寄席のエピソードなども載せられており、興味深い。

上述のように、高座本の台詞中の多くの漢字にルビが振られている。手製の文章にデータ入力時にルビを振ることは相当な労力であろうと推察される。ルビを振る言葉の選定に統一した基準はないようであるが、読み方の複数ある語や読みにくい固有名詞はもちろん、「入（へえ）りやすい」「お前（まい）さん」などの江戸弁風の発話にはほぼ100%の語彙にルビが振られている。インタビュー時のルビについての圓窓の話は第3章より再掲する。

圓窓：最初のワープロのときはルビ打てなかった。それで、これ不便だなと思ってさ。それで、ようやくルビ打てますよっつったって、ルビはもうちゃんと1行分になっちゃうの。だから、台詞がやたらに膨らんじゃって、これは不便だなと思って、そのうちに、じゃあいっそのことパソコンやりましょうってあきらさんが言ってくれて、パソコンに移ったら、まあ何でもできんじゃないの。ああ、こら、便利だって思ってさ。

ここで登場する「あきらさん」は、第4号巻末の考察集にエッセイを寄せているが、そのエッセイ中に以下の記述がある。

この噺はたしか、マスターネットにアップするために師匠（筆者注：圓窓）の噺を録音して自分で打ち込んだような記憶があります。

最初、普通に文章を入力して師匠に見て頂いた時に、師匠から「江戸の言葉が再現できていない」と指摘されて、江戸の言葉をなるべく正確に再現するために、「俺（おら）あ」とか「そこいいくと」

とか、ちいさな母音を駆使して入力しました。(以下略)

(「あきらの『圓窓高座本を読む』三「鬼の涙」文 窓門会会員・あきら」より)

第4号の初版は1988年である。圓窓がパソコン以前のワープロ入力時にもルビにこだわっていた様子がわかる。おそらくは手書きノート時代もルビを振っていたことであろう。ルビというよりも言葉の一つ一つの発話を圓窓が重視していることがうかがえる。

## 5. シリーズ全体の構成 (噺の分類)

高座本各号の第一ページには演目の脇に噺を象徴する語句が並べられている。本稿ではこの語句を「キーワード」と呼ぶ。シリーズの全体像を把握するために、本章ではこのキーワードを考察し、圓窓高座本シリーズが持つ噺の種類を分類整理する。尚、キーワードについて不明な点は圓窓とのインタビュー時に確認し、全ての分類は作成者である圓窓の判断によって判定した。

キーワードは、例を挙げると、次のように表されている。

- 第1号『唐茄子屋』 「古典人情小商人／若旦那親族唐茄子廓」
- 第4号『鬼の涙』 「創作人情／鬼桃太郎節分見世物」
- 第6号『子褒め』 「古典滑稽／世辞愛嬌誕生鸚鵡返し」

などである。これらのキーワードを演目とともに一覧にすることによって、噺の分類を試みた。全演目のキーワードを概観してわかるのは、「古典」か「創作」か、「人情」か「滑稽」かの区分の語句がほとんどの号に、しかもキーワードの並びの初めに記されていることである。そこで、一覧表の項目に「古典か創作か」「人情か滑稽か」という二つの区分を立てていずれかを選び、その他のキーワードは噺全体を象徴する意味合いのあるものから順に並べていくこととした。一覧表作成作業を更に進めると、「与太郎」「若旦那」など、噺のテーマや一般に「○○噺」と呼ばれることの多い語句が頻出することがわかる。与太郎の噺には、与太郎の言動が中心に展開するものと与太郎が登場するだけのものとの判別が困難な場合もあり、特別な分類項目とするかは保留とした。また、「仏笑」という圓窓の造語が噺の種類を表すキーワードとして使用され、「古文」も噺の種類に用いられていることがわかった。この準備をした上で、二回目と三回目のインタビューで圓窓のキーワードに込めた意図を確認することとした。

### 5-1. 噺の出自からの分類

二回目と三回目のインタビューでは、噺の区分に関するキーワードの定義を主な話題とした。圓窓が定義する「古典」は「江戸時代にできた噺」、「新作」は「明治以降に作られて現在まで高座にかけられている噺」、「創作」は「作者がはっきりしている噺」、「圓窓創作」は「圓窓が小咄や小説から落語に仕立てた噺」という区分をしているとのことであった。その他、明治の口述速記本などにあって現代で語る人のない噺を圓窓が改めて落語として仕上げたものもあることがわかり、古典でも創作でもない「掘り起こし」という分類項目を新たに作成した。圓朝による『牡丹灯籠』は、圓窓の定義で



「新作」に入るところを、その落語史上の存在感と舞台設定が江戸時代であることから今回は筆者の提案で「古典」に区分したが、この点は今一度検証したい。その他、実際の高座でマクラとして語られる小咄などを集めた、文字通りの「小咄撰集」もある。小咄撰集には、古典的な小咄から圓窓の創作小咄まで多種集められている。尚、「小咄」の漢字表記は、圓窓の意思による。また、圓窓が落語の稽古をつけている一般人が改作した噺が一つあり、「その他」に分類する。

以上の分類を、「出自からの分類」と位置づけた上で389席を分けると、下の表のようになる。

表1 圓窓高座本シリーズにおける噺の出自からの演目分類

分類	噺の数
古典	274
新作	9
創作	10
掘り起こし	6
圓窓創作	75
小咄撰集	15
その他	1
計	389

出自からの分類で注目すべきは、「圓窓創作」の演目の多さであろう。圓窓創作は75席、明治の書籍からの圓窓による「掘り起こし」6席を加えると、圓窓が落語として成立させた噺は81席を数え、高座本シリーズの2割を超える。圓窓創作のうち、文学を基にしたものが18、次いで民話を基にしたものが12、小咄を基にしたものが10、その他、狂言、講釈、芝居、能などを基にしたものが続く。文学は、芥川龍之介、宮沢賢治、シェイクスピア、金子みすゞ、唯川恵などの小説を基にしている。また、圓窓の師匠である六代目圓生の演目だけを借用し、内容を大幅に変えた<sup>iv</sup>『五百羅漢』のような噺もある。さらに興味深いのは、基にしたものをはっきり特定できない噺が21を数えることである。以前、圓窓が「何を見ても聞いても落語に結び付けて考える」と話しているのを耳にしたことがある。元ネタのない創作落語はそのようにしてアイデアが形作られていったものと考えられる。この発想の基については、今後さらに作者圓窓へのインタビューを重ねる必要がある。

創作にかかる噺の一方で、「古典」は274席、明治大正時代の新作9席を合わせると283席となる。283席の古典落語を一席物として完成させていることの意義も今後検証したい。

このように噺の数に言及すると、圓窓が500の異なる噺を30年かけて高座にかけたという「圓窓五百噺」の活動と高座本シリーズの関係について触れざるをえないだろう。500の噺を口演する活動を完了した今、高座本という文字にしているのはその500の噺であるのか否か。この点に関する今回の圓窓とのやり取りが以下である。

筆者：これ（筆者注：圓窓五百噺）と高座本って、もう全く無関係といたらあれですけど。

圓窓：いや、やっぱり五百噺（筆者注：圓窓五百噺）で、500（の噺を）勉強してみようっていう会を自分でやっているうちに、ワープロっていうのを知ったもんで、ワープロに自分の落語をちょこちょこっと入れているうちに、今度パソコンになって、それからだもんね。だから歴史は浅いよ、まだ。高座本はね。五百噺は何とか終わったけど、もうその出来たるや、粗製乱造なところ

もあるし。

筆者：五百噺は500あるのに、高座本はまたその、粗製乱造と師匠は言ってますけど、それを全部本にするわけではなく、もう自分の思ったものが、新しく選んだものしか本にしてないってことですね。

圓窓：そう。五百噺でやったのは、そのまんまはちょっと無理だかっていうほうが、半ば多いかもしれないね。だから、その後、高座本作りながらその話を整理してった。だから、高座本、五百噺で勉強して、その後、よしてその気になって高座本に整理してったのが、今の高座本。

「圓窓五百噺」で高座にかけた噺は、圓窓自身は「粗製乱造」というイメージを持ち、完成度について本人は納得していなかったと説明している。その中から、あるいはその他の噺を整理していったのが高座本であるという。高座本には、「圓窓五百噺」の何番目につけられた噺であるかも記載があるので、この点も今後の研究対象となりうる。

## 5-2. 噺の性格からの分類

出自に次ぐ着目点は、「人情噺」か「滑稽噺」かである。「人情噺」とは、一般に、情感を誘う笑いの少ない噺と捉える向きもあれば、笑いも人情の一つであるので滑稽な噺も人情噺であると捉える向きもあるが、本稿では、圓窓の意思により前者のように分類する。シリーズ中、人情噺は42、滑稽噺は217、艶笑噺は1、圓窓が「みつつのどれにも入らない」と判断したものが129である（表2）。「怪談噺」としたものは3席あるが、怪談噺であると同時に人情噺か滑稽噺であると圓窓が判断したので、分類階層が異なるものとし、この分類には加えない。艶笑噺が一席しかないのは「人にあげたり、稽古したりしにくいでしょ」との圓窓談である。

表2 圓窓高座本シリーズにおける噺の性格からの演目分類

	噺の数
人情噺	42
滑稽噺	217
艶笑噺	1
(未区分)	129
計	389

その他、地語りによって噺が進行する「地噺」、狂歌を中心に噺が展開する「狂歌噺」は、圓窓が噺の分類として「捨てがたい」とした分類区分である。地噺の例として『たが屋』、狂歌噺の例として『鋏盗人』などがある。地噺と狂歌噺は、人情噺と滑稽噺と相反関係にはない。滑稽噺であり地噺でもある噺に『目黒のさんま』などがある。地噺は9席、狂歌噺は8席ある。

## 5-3. 噺のテーマからの分類

噺の種類を表すキーワードの中で圓窓の造語と考えられるのは、「仏笑」である。これは寺、僧侶、経、道端の地蔵などが登場する噺に付けられているキーワードである。よく知られている噺では『菟蓐問答』のように場面が寺で登場人物が仏教関係者と、まさに仏教の世界の笑い話から、『寿限無』『山号寺号』ように噺に経や寺が出てくる程度のもので、このキーワードがつけられている。

「古文」は『道灌』『崇徳院』など、和歌の名手が登場したり和歌を吟じたりすることを中心に展開する噺である。普段の高座で圓窓が古文について語ることは多いが高座本は予想外に少なく、シリーズ中15席となっている。この15席中、「古典」と分類されるのは8席、圓窓創作は5席、掘り起こし2席となっている。

「怪奇」のキーワードは26席を数える。「怪談」と「怪奇」の違いが曖昧であったが、圓窓と議論した結果、『牡丹灯籠』『もう半分』などの怪奇現象によって恐怖を覚える噺を「怪談」、『夏の医者』『狸の札』など架空の現象（＝怪奇現象）によっておもしろおかしくなっている噺は「怪奇」とすることでひとまず決着した。

しかし、『ろくろっ首』は怪談だろうか、怪奇だろうか。本稿では「怪奇」に分類したが、演者によってどちらにもなりうる。また、『天狗裁き』に登場する天狗は怪奇ではあるが実は寝ている間の夢で見ただけのものかもしれない、それは怪奇と言えるのか。分類について圓窓と議論したキーワードは、他にも「与太郎」「若旦那」「親子」「廓」「色恋」がある。いずれも、「与太郎噺」など噺の分類に用いる評論があるようなテーマ性のあるキーワードである。圓窓も演目を見ながら「これは“与太郎噺”」「“親子”だな」など度々述べている。若旦那の放蕩と親子の情愛は一つの噺で登場することが多い。与太郎は与太郎の台詞や性格がテーマとなることもあるが、人情噺のくすぐりとして一瞬登場することもある。いずれにしてもテーマと登場人物によって噺を分類するには更に検討することが必要であると考えさせられる結果となり、未完の分類である。

## 6. 次の段階の研究に向けて

圓窓の高座本シリーズは、一席一席は圓窓の経験と熟考の凝縮した集大成である。一方で、私家版であることから、体裁の未整備や誤字など出版物ほどの完成度は持たないと言わざるをえない。しかし、噺の数の多さから、鑑賞する側の読み物として楽しむことができると同時に、演じることを始める側にとっては選択肢が潤沢な教材にもなっている。コロナ禍直前には、高座本で落語の稽古をしながら圓窓の指導を受けるアマチュアは200人ほどいたという。また一方で、巻末の考察集や演ずるための難易度など、圓窓が日々月々に付け加えている雑多で多くの情報にはその資料的価値の高さがうかがわれ、従来の落語資料との比較検証という意味でも、研究課題が様々に想定される。

本稿では高座本シリーズの研究の突破口として、圓窓とのインタビューを中心にシリーズ全体を概観した。特に今回はその成り立ちと噺のキーワードに焦点を当てて整理を試みることで、高座本にある情報の多さに改めて気づくこととなった。今後も圓窓との対話にヒントを受けながら、圓窓高座本シリーズの価値を検証していきたい。

<sup>i</sup> 教育出版『国語4下』（2000）

<sup>ii</sup> 「初版」は、圓窓によると当該噺をデータ入力し初めて完成した年月日であるとのこと。

<sup>iii</sup> 興津要編（1980）『古典落語』講談社文庫、麻生芳伸編（2007）『落語百選』ちくま文庫を参照した。

<sup>iv</sup> 「六代目圓生の演目だけを借用し、内容を大幅に変えた」は圓窓談による。

## 【参考文献】

坂部裕美子（2017）「Sinfonica での研究伝統芸能興行データベース集計・その一里塚（19）『落語家

---

データベース』の集計」『Estrela』283, 20-23

広瀬和生『嘶は生きている』（2017）朝日新聞出版, p 3

公益財団法人日本デザイン振興会「グッドデザイン賞受賞対象一覧1984年」

<https://www.g-mark.org/award/describe/10647> (2020. 09. 16閲覧)

東芝未来科学館「日本初の日本語ワードプロセッサ」

[https://toshiba-mirai-kagakukan.jp/learn/history/ichigoki/1978word\\_pro/index\\_j.htm](https://toshiba-mirai-kagakukan.jp/learn/history/ichigoki/1978word_pro/index_j.htm)

(2020. 09. 16閲覧)

## 【資料】三遊亭圓窓高座本（私家版）第1号～第389号演目及び主なキーワード一覧

高座本 NO	演目	噺の出どころ	人情/ 滑稽	噺の 大分類	噺の 小分類
1	唐茄子屋	古典	人情		
2	叩き蟹	古典	人情		
3	竹の水仙	古典	人情		
4	鬼の涙	創作	人情		
5	鼓が滝	古典			古文
6	子褒め	古典	滑稽		
7	三軒長屋 上	古典	滑稽		
8	道灌	古典	滑稽		古文
9	和歌三神	古典			古文
10	半分垢	古典	滑稽		
11	転失気	古典	滑稽		仏笑
12	釜泥	古典	滑稽		
13	六尺棒	古典	滑稽		
14	人呑鬼	圓窓創作		地噺	怪奇
15	蝦蟇の娘	掘り起こし(古典)	滑稽		
16	中村仲蔵	古典	人情		
17	寿限無	古典	滑稽		仏笑
18	猫忠	古典			
19	町内の若い衆	古典	滑稽		
20	お花半七 上(宮戸川)	古典	人情		
21	猫定	古典	人情		
22	後生鰻	古典	滑稽		仏笑
23	鰻沢	古典	人情		仏笑
24	野田の宿帳	圓窓創作			古文
25	淀五郎	古典			
26	親子酒	古典	滑稽		
27	有馬の秀吉	古典		鱧/鰻	古文
28	ざこ八	古典	人情		
29	饅頭怖い	古典	滑稽		
30	明日ありと	圓窓創作			仏笑
31	牛褒め	古典	滑稽		
32	萩褒め	圓窓創作	滑稽		
33	写経猿	圓窓創作			仏笑
34	梅の春 上	掘り起こし(明治)		狂歌	古文
35	お若伊之助	古典			怪奇
36	押絵になった男	圓窓創作			
37	洒落番頭(庭蟹)	掘り起こし(古典)	滑稽		
38	法螺の種	圓窓創作			
39	首提灯	古典			怪奇
40	三味線栗毛	古典	滑稽		
41	牡丹灯籠 下駄の音	古典		怪談	
42	亀の手足	圓窓創作			怪奇
43	九品院 蕎麦喰い地藏	圓窓創作			仏笑
44	笠の内(日本夫婦げんか考・浮気のいましめ)	圓窓創作			
45	澤蔵司 蕎麦稲荷	圓窓創作			仏笑
46	壺算	古典	滑稽		
47	時蕎麦	古典	滑稽		
48	おはぎ大好き(牡丹餅大好き・蛙餅)	圓窓創作	滑稽		
49	坐禅の遊び	圓窓創作			
50	山茶花咲いた	圓窓創作			
51	夢の枕屋・コラボ 地唄と	圓窓創作			
52	鹿の巻筆	圓窓創作	人情		
53	江戸の商人 胸の肉(ベニスの商人)	圓窓創作			
54	熱き思い(椿説蝦夷訛より)	新作(明治)	人情		
55	狙俵豆腐	圓窓創作	人情		
56	小判十一両(貧の意地)	圓窓創作	人情		
57	父帰る	圓窓創作			
58	お富の貞操	圓窓創作			
59	通夜の烏(吉住万蔵)	創作			仏笑
60	水神	創作	人情		
61	夕立屋	古典			怪奇
62	親子蕎麦	圓窓創作			
63	百年目	古典	人情		
64	みんな違って	圓窓創作	人情		
65	浦島老人	圓窓創作		地噺	
66	抜け雀	古典	滑稽		
67	浮世根問	古典	滑稽		
68	丁半指南(三木助歳時記)	圓窓創作			
69	青菜	古典	滑稽		
70	雷月日	圓窓創作			怪奇
71	子別れ 下(子は鎧)	古典	人情		
72	雁風呂	古典			
73	帯久	古典			
74	木乃伊取り	古典			
75	お節徳三郎 下	古典	人情		
76	蠅寄せ	新作(平成)			
77	セロ弾きのゴーシュ	圓窓創作			
78	吾輩は坊っちゃんである	圓窓創作			
79	救いの腕	圓窓創作			
80	馬のす	古典	滑稽		
81	一目上がり	古典	滑稽		古文
82	千早振る	古典	滑稽		
83	鶴	古典	滑稽		
84	欠伸指南	古典	滑稽		
85	金明竹	古典	滑稽		
86	厩火事	古典	滑稽		
87	頭山	古典			怪奇
88	桃太郎	古典	滑稽		
89	真田小僧	古典	滑稽		
90	元犬	古典	滑稽		
91	ぞろぞろ	古典			仏笑
92	権兵衛狸	古典	滑稽		
93	たが屋	古典		地噺	
94	ういろう売り	圓窓創作			
95	目黒の秋刀魚	古典	滑稽	地噺	
96	普段の袴	古典	滑稽		
97	雛鏝	古典	滑稽		
98	平林	古典	滑稽		

高座本 NO	演目	噺の出どころ	人情/ 滑稽	噺の 大分類	噺の 小分類
99	十徳	古典	滑稽		
100	蝦蟇の油	古典	滑稽		
101	からくり料理	圓窓創作			
102	夢の枕屋・コラボ 高座舞	圓窓創作			
103	夢の枕屋・コラボ 日舞	圓窓創作			
104	雷月日・コラボ 日舞	圓窓創作			怪奇
105	文七元結	古典	人情		
106	首屋	古典	滑稽		
107	粗忽長屋	古典	滑稽		
108	孝行糖	古典	滑稽		
109	鼠	古典	人情		
110	看板の一	古典	滑稽		
111	武助馬	古典	滑稽		
112	明烏	古典			
113	猫の茶碗(猫の皿)	古典	滑稽		
114	薬缶	古典	滑稽		
115	枯木屋	圓窓創作			怪奇
116	薬缶泥	古典	滑稽		
117	三方一両損	古典	滑稽		
118	野晒し	古典	滑稽		
119	将棋の遊び	圓窓創作	滑稽		
120	甲府い	古典	人情		仏笑
121	柳田角之進	古典	人情		
122	閑かさや	圓窓創作	滑稽		古文
123	豆屋	古典	滑稽		
124	垂乳根	古典	滑稽		
125	芋泥(芋俵)	古典	滑稽		
126	チャンコの恩返し	圓窓創作	人情		
127	高座の徳利	圓窓創作	人情	狂歌	
128	節分鍋	圓窓創作	滑稽		
129	来ぬ人を	圓窓創作	滑稽		古文
130	花筏	古典	滑稽		
131	権助魚	古典	滑稽		
132	チリトテチン	古典	滑稽		
133	八九升	古典	滑稽		
134	替わり目(絡み酒)	古典	滑稽		
135	みんな違って・コラボ ピアノ	圓窓創作			
136	鼠・コラボ ピアノ	古典			
137	城木屋	古典	滑稽		
138	叩き蟹・コラボ ピアノ	古典	人情		
139	湯屋番	古典	滑稽		
140	通夜の猫(猫怪談)	古典	滑稽	怪談	
141	伽羅の下駄	古典	滑稽		
142	お節徳三郎 上	古典	滑稽		
143	花見酒	古典	滑稽		
144	はなむけ	古典	滑稽		
145	藪入り	古典	人情		
146	本膳	古典	滑稽		
147	初天神	古典	滑稽		
148	鼻欲しい	古典	滑稽		
149	権助提灯	古典	滑稽		
150	河豚鍋	古典	滑稽		
151	コーラスコーヒー	圓窓創作	滑稽		
152	九年母	古典	滑稽		
153	小言念仏	古典	滑稽		仏笑
154	二十四孝	古典	滑稽		
155	天災	古典	滑稽		
156	尻餅	古典	滑稽		
157	高砂や	古典	滑稽		
158	猫に小判	圓窓創作	人情		仏笑
159	ほうじの茶	古典	滑稽		
160	鬼子母神 藪中の蕎麦	圓窓創作	人情		仏笑
161	叩き蟹・コラボ コーラス	古典	人情		
162	水神・コラボ ピアノ	創作			仏笑
163	羅宇の仲人	掘り起こし(古典)		狂歌	
164	愠気の火の玉	古典			怪奇
165	釣女房(妻の釣り)	創作			
166	法要猫	圓窓創作			仏笑
167	匙加減	古典			
168	百川	古典	滑稽		
169	くしゃみ講釈	古典			
170	熱き思い・コラボ 篠笛 原名・椿節蝦夷訛	新作(明治)			
171	菟蓐問答	古典			仏笑
172	火事息子	古典	人情		
173	井戸の茶碗(茶碗屋敷)	古典	人情		
174	初音の鼓	古典	滑稽		
175	桶屋裁き(佐々木政談)	古典			
176	味噌豆	古典	滑稽		
177	道具屋	古典	滑稽		
178	松山鏡	古典			
179	頂き猫(猫餅)	古典	人情		
180	だくだく	古典	滑稽		
181	ろくろっ首	古典			怪奇
182	万病円	古典	滑稽		
183	揺れるとき	圓窓創作			
184	もう半分	古典	人情	怪談	
185	銭垂れ馬	圓窓創作			
186	五七五(雑俳)	古典	滑稽		古文
187	厄払い	古典	滑稽		
188	南瓜屋	古典	滑稽		
189	開帳の雪隠	古典	滑稽		仏笑
190	三人無筆	古典	滑稽		仏笑
191	ご印文	古典	滑稽		仏笑
192	富士参り	古典	滑稽		仏笑
193	清正公酒屋	新作(明治)			
194	一分茶番	古典			
195	権助芝居	古典			
196	古木の羽織(紫檀楼古木)	古典		狂歌	

高座本 NO	演目	噺の出どころ	人情/ 滑稽	噺の 大分類	噺の 小分類
197	五月幟	古典			
198	二番煎じ	古典	滑稽		
199	俵相撲	古典	滑稽		
200	鼻の下	古典	滑稽		
201	指相撲	圓窓創作			
202	花色木綿	古典	滑稽		
203	阿武松	古典			
204	長屋の花見	古典	滑稽		
205	蕎麦清 (蕎麦の羽織)	古典	滑稽		怪奇
206	もぐら泥	古典	滑稽		
207	石一つ (白鷺の東庵)	創作			怪奇
208	禁酒番屋	古典	滑稽		
209	代脈	古典	滑稽		
210	蚊戦	古典	滑稽		
211	紺屋高尾	古典			
212	一人酒盛	古典	滑稽		
213	幫間腹	古典	滑稽		
214	お菊の皿 (皿屋敷)	古典	滑稽		
215	夢の枕屋	圓窓創作			怪奇
216	王子の狐	古典	滑稽		
217	位牌屋	古典	滑稽		
218	鋏盗人	古典		狂歌	
219	手向けのかもじ	古典	滑稽	狂歌	仏笑
220	山号寺号	古典	滑稽		仏笑
221	質屋蔵	古典	滑稽		怪奇
222	堪忍袋	古典	滑稽		怪奇
223	錦の袈裟	古典	滑稽		
224	瓢箪屋政談	古典			
225	仏相撲	圓窓創作			仏笑
226	お見立て	古典	滑稽		
227	お花半七 下 (宮戸川)	古典			
228	石一つ・コラボ ピアノ	創作			怪奇
229	松竹梅	古典	滑稽		
230	狸の札	古典	滑稽		怪奇
231	転宅	古典	滑稽		
232	短命	古典	滑稽		
233	死神	古典	人情		怪奇
234	芝浜	古典	人情		
235	不孝者 別名・茶屋迎え	古典	滑稽		
236	二人癖	古典	滑稽		
237	饅頭怖いの	稽古人改作			
238	試し酒	古典	滑稽		
239	黙り餅	圓窓創作	滑稽		
240	一足違い	新作 (平成)	滑稽		
241	お膳の幽霊 (へっつい幽霊)	古典	滑稽		
242	茶の湯	古典	滑稽		
243	強情灸	古典	滑稽		
244	水屋の富	古典	滑稽		
245	お血脈	古典		地噺	仏笑
246	夏の医者	古典	滑稽		怪奇
247	九郎蔵狐	古典	滑稽		
248	長短	古典	滑稽		
249	紙入れ	古典	滑稽		
250	虚空蔵鯉	圓窓創作			仏笑
251	大工調べ	古典	滑稽		
252	留守番小坊主	圓窓創作			仏笑
253	はてなの茶碗	古典	滑稽		
254	四人癖	古典	滑稽		
255	小粒相撲	古典	滑稽		
256	粗忽の釘	古典	滑稽		
257	三年目	古典			
258	酢豆腐	古典	滑稽		
259	稽古屋	古典	滑稽		
260	道中傘	圓窓創作			
261	天狗裁き	古典	滑稽		怪奇
262	火炎太鼓	古典	滑稽		
263	田能久	古典	滑稽		
264	目薬	古典	艶笑		
265	粗忽参り	古典	滑稽		仏笑
266	粗忽風呂	古典	滑稽		
267	寝床	古典	滑稽		
268	奉加帳	圓窓創作			
269	三井の貸し傘	圓窓創作	人情		
270	化け物使い	古典			怪奇
271	宿屋の富	古典	滑稽		
272	人情八百屋	創作	人情		
273	回しの遊び (五人回し)	古典			
274	羽団扇	古典	滑稽		
275	三人旅 発端	古典	滑稽		
276	三人旅 馬	古典	滑稽		
277	三人旅 鶴屋	古典	滑稽		
278	三人旅 押し鏡	古典	滑稽		
279	小言幸兵衛	古典	滑稽		
280	藁人形	古典			怪奇
281	蕎麦の殿様	古典	滑稽		
282	狸の鯉	古典	滑稽		怪奇
283	長屋馬 (妾馬・八五郎出世)	古典			
284	子供 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
285	ミシンの涙	圓窓創作	人情		
286	締め込み	古典	滑稽		
287	酒 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
288	泥棒 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
289	蕎麦 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
290	珈琲 マクラ小咄撰集2013	小咄撰集			
291	医者 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
292	狸の賽	古典	滑稽		怪奇
293	佐野山	古典			
294	碁将棋 マクラ小咄撰集	小咄撰集			

高座本 NO	演目	噺の出どころ	人情/ 滑稽	噺の 大分類	噺の 小分類
295	碁泥	古典	滑稽		
296	夢の酒	古典	滑稽		
297	珈琲 マクラ小咄撰集2014	小咄撰集			
298	吝嗇 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
299	草鞋の裏	創作			
300	風呂敷	古典	滑稽		
301	猫久	古典	滑稽		
302	将棋の殿様	古典			
303	五百羅漢	圓窓創作	人情		
304	千両みかん	古典	滑稽		
305	將軍の養	古典		地噺	
306	首ったけ	古典	滑稽		
307	山崎屋	古典			
308	黄金餅	古典	滑稽		
309	応挙の幽霊	古典			
310	善哉校舎(善哉公社)	新作(明治)	滑稽		
311	駱駝	古典	滑稽		
312	大師の杵	古典		地噺	仏笑
313	近江八景	古典	滑稽		
314	三軒長屋 下	古典	滑稽		
315	どん尻の葉っぱ	圓窓創作			
316	鼠穴	古典	人情		
317	四段目	古典	滑稽		
318	熊野の母	圓窓創作			
319	大山参り	古典	滑稽		仏笑
320	東海道狂歌	圓窓創作		狂歌	古文
321	梅の春 下	掘り起こし(明治)		狂歌	古文
322	居残り	古典			
323	突き落とし	古典			
324	洒落小町	古典			古文
325	悋気の独楽	古典	滑稽		
326	素人鱈	古典	滑稽		
327	茗荷宿	古典	滑稽		
328	宿屋の仇討	古典	滑稽		
329	袋田の瀧	圓窓創作			古文
330	蔵前駕籠	古典	滑稽		
331	珈琲 マクラ小咄撰集2015	小咄撰集			
332	壁に耳あり	圓窓創作			
333	秋の夕暮れ	圓窓創作	滑稽		
334	首の松	古典	滑稽		
335	動物園	新作(大正昭和)	滑稽		
336	一文惜しみ(五貫裁き)	古典			
337	包丁	古典	滑稽		
338	紀州	古典		地噺	
339	夢金	古典	滑稽		
340	五日講釈	古典	滑稽		
341	金蔵寺蕎麦閻魔	圓窓創作			仏笑
342	幽霊長屋(お化け長屋)	古典	滑稽		
343	里帰り	創作	人情		
344	星野屋	古典	滑稽		
345	加賀煙管	圓窓創作			
346	通夜の蕎麦	圓窓創作			怪奇
347	二階借り	古典	滑稽		
348	掛け取り	古典	滑稽		
349	七の字	古典	滑稽		
350	無精床	古典	滑稽		
351	品川心中 上	古典	滑稽		
352	品川心中 下	古典	滑稽		
353	粗忽の使者	古典	滑稽		
354	反魂香	古典	滑稽		
355	戯れ地藏	圓窓創作			
356	祇園会	古典	滑稽		
357	弥次郎	古典	滑稽		
358	雷門の招き猫	圓窓創作	滑稽		
359	人形買い	古典	滑稽		
360	べらぼう蕎麦	古典	滑稽		
361	かつぎ屋	古典	滑稽		
362	穴泥	古典	滑稽		
363	文違い	古典	滑稽		
364	麻暖簾	古典	滑稽		
365	珈琲 マクラ小咄撰集2016	小咄撰集			
366	雷電の黒星	圓窓創作			
367	笠碁	古典	滑稽		
368	崇徳院	古典	滑稽		古文
369	七段目	古典	滑稽		
370	蛸坊主	古典	滑稽		仏笑
371	金魚の芸者	古典	滑稽		
372	珈琲 マクラ小咄撰集2017	小咄撰集			
373	船徳	古典	滑稽		
374	花見の仇討	古典	滑稽		
375	反対車	新作(明治)	滑稽		
376	動物 マクラ小咄撰集	小咄撰集			
377	葱蕎麦地藏	圓窓創作	滑稽		仏笑
378	これぞ七種	圓窓創作	滑稽		
379	珈琲 マクラ小咄撰集2018	小咄撰集			
380	ひとひらの雪	古典	人情		
381	天福地福	圓窓創作	滑稽		
382	立て替えの遊び(煙草の火)	古典	滑稽		
383	石返し	古典	滑稽		
384	珈琲 マクラ小咄撰集2019	小咄撰集			
385	稲川の鼠戻(稲川)	古典			
386	三井の大黒	古典	滑稽		
387	あわて朝顔	圓窓創作	滑稽		
388	宗論	新作(大正)	滑稽		
389	御神酒徳利	古典	滑稽		